

第六十話 令和元年 九月八日

【沼津兵学校<一> 箱館戦争参戦組】

ご先祖さんが沼津兵学校と縁{ゆかり} あった拙者にとって【沼津兵学校】は語っておかねばならぬ明治維新の一隅である。

昭和十四年、映画「沼津兵学校」。今井正の監督第一作。こんなシーンがある。

函館戦争で父が戦死したことを新聞で知った沼津兵学校学徒、激高し、函館五稜郭へ駆けつけようとする。それをかつて官軍だった藩からの留学生ら学友が止める。戦雲急を告げる時世、かつての痼を残さず挙国一致で頑張ろうとのメッセージだった。

函館戦争へ駆けつけた学徒がいたかどうかはわからぬ。しかし、学徒縁者で榎本軍に加わった幕臣は多くいた。

榎本武揚が沼津兵学校の教授に誘われたのは、兵学校と同時に設立された陸軍医局、のちの沼津病院のナンバー2の娘婿であり、兵学校の一等教授と美兄弟であったからだ。

五稜郭は陥落。降伏。榎本軍へ走った幕臣は東京で禁固刑。明治三年、榎本、大島ら首脳部を除き釈放。うち千人弱が静岡藩に帰参。

かつての幕臣たちは、一代限りの藩籍、一代限りの幕臣との誓約で、無役の三等勤番組に編入。藩内各地に割付ら得た。

函館戦争で戦った戦士たちの多く駿河、遠江の地で農民、町民とになる。

一代限りの武士、一人身の武士は土地の娘を嫁にし、子を育てた。

もともとから譜代の土地。地元民は快く向か入れ、婿に、また娘を嫁がせた。

函館戦争、慶応四年（明治元年）から明治二年。明治四年、国民国家の規範となる戸籍法（壬申戸籍）がつくられる。つくりはじめてから元幕臣たちが戸籍に載るまで五、六年はかかったろう。

農民、町民となった元武士は「士族」とせず「平民」とした。薩長、足軽でも「士族」となった。

平民となった元武士は息子、娘に云った。「お前らは武士に子だ」

息子は墓に父の家紋を刻んだ。

郷里の菩提寺の墓、武家の家紋が刻まれた墓石が多い。沼津兵学校に縁〔ゆかり〕があった者だろう。